
二神 ～神は悪を裁くのみ～

白上 白斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二神　　く神は悪を裁くのみく

【Nコード】

N0355X

【作者名】

白上　白斗

【あらすじ】

一人の謎の男。彼は様々な魔法を使う。それも常識はずれの魔法を。

彼のことを口を揃えて言う。『神使い』と。

その神使いに着いていく少女、ミル。彼女は幻想使い。しかし、ある事情で体が子供になってしまった。

この二人は様々な敵と遭遇し、全てのあやまちを正す。

く神は悪を

裁くのみ

V S. 銃使いガンマン

魔法の世界。

呪文を唱える、魔方阵マジマジを構築する。そうして魔法を発動。

それが魔法発動の規則。

これ以外には無い。それが魔法。

男二人。場所は荒れ地。ギャラリーは彼らを中心に五〇〇メートルぐらい離れている。

前者はボロキレを覆っているだけであつた。手には計十個の指輪。一つ一つの模様が違い、宝石が付いている。

後者は西部劇に出てきそうな格好をしている。左手に二丁の拳銃、右手には何も持っていない。

彼らは徐々に距離を置いてく。まさに西部劇の打ち合いだ。

「一、二」

一歩ずつ進んでいく。

「三！」

西部劇の男は三步目を出すとき、進行方向と逆に向けた。対してボロキレの男は立ち止まった。

「ハハッ！ 死ぬがよい！」

そう言い、銃を素早く構えた。左手の二丁の銃を少しずらして握る。

「悪の力を我が手に！ 貫け、闇！ 散るがよい、天！」

すると、銃先から黒い光が飛び散った。漆黒の針が光の中から出てきた。目標はボロキレの男。

多方向に進行方向を変えて中間ぐらいに目標へ向かう。

「神は悪を裁くのみ。闇を打ち消すは、天と光！」

右腕を前に出し、漆黒の針を握りつぶした。

「粉碎、だ」と

西部の男は驚きを隠せずにいた。

「このオレの力が……」

「果てなく散る。それが悪」

ボロキレの男は握りつぶした手を開いた。そして左手を引き、

「神は悪を裁くのみ。灼熱の炎は悪を包む」

引いた手を開き、力を込める。その手の中から炎の塊が生まれる。

炎の塊をボールのように扱い、西部の男に向かって投げた。周りの酸素を喰い、力を増す。

「こんなもの、鎮圧してやる！」

「倒れるもんならやってみろ」

西部の男は左手の銃を構えた。そして、一丁の銃口に魔^{しき}方陣が現れた。

それを見たボロキレの男は、

「そんなものを使って何が楽しい。破壊か？　それが神から遠ざ

けられる一つの理由だ」

その銃口の魔^{しき}法陣は悪魔の式と呼ばれる物の一種であった。

「黙れ！　お前に何が分かるといふ。オレの苦しみ！」

「知るものか！　第一に貴様の苦しみについて語られた覚えなどない。第二に、神が見離れた者の事など知ったことではない」

「何を言う！　私は誓った」

「悪魔にか」

「違う！」

「そう言えるのも、あと少しだ」

ボロキレの男の投げた炎の塊の数が増える。まずはアメーバの様に広がり、分裂して形を作る。これを繰り返してたくさん炎の塊が生まれる。

「この魔^{しき}方陣は悪魔の破壊の壁。そして、」

もう一方の方から更なる魔法陣しほが現れる。

「これが光矢こうやの針の式。つーか、魔方陣っていちいち説明しなくちやいけないんだよな。相手に手の内を教えるなってよ。まあ、カスいわけはねーな」

「勘違いをするな。魔方陣は式を表し、名称を言って発動する魔法。消して種明かしをするわけではない」

「そんなこと言ってる暇があるなら」

西部の男の前に壁が現れ、

「打破する策でも練りな！」

炎を止めた。

そして、炎の塊を破壊した。周りには火の粉が散る。火の粉とは言えど、摂氏八〇〇〇度もする。

「まだ終わんねーぜ、光矢こうやが残ってる事を忘れるな」

壁の中から光輝く矢が飛んでくる。壁は崩れず、通り抜ける。

風を裂き、轟と音を立てている。

光矢こうやは光り輝きながら飛ぶ。軌跡には光が散る。

「神は悪を裁くのみ。悪人になど光など使えない。偽りの光には、真実の光！」

ボロキレの男は右手を前に出す。そして手を勢い良く開く。そこから光が散った。蛸が飛ぶように、優しく散っていく。

その光に矢が触れる。すると、矢はガラスが割れるようにパリンと割れた。

「なぜ、光矢こうやが負ける」

「驚くことはない。ただ、悪人は善人に勝つことなど出来ないと言うことだ」

そう言うのと両手を引き、

「終わらせる。大地を汚す者、母なる大地の神からの天罰を受けるがよい！」

ボロキレの男は両手を高く上げ、その後に地面に手をついた。すると、西武の男に向かって地面が割れていく。

地割れはさほど早くはない。

「こんなねこだましなんか！」

——ッ！」

西武の男は逃げようとしたが足が動かない。土が盛り上がって足を捕まれていた。

「右手は動きを止め、左手は破壊を生む。左手の方が力はあるがスピードがない。だが、右手の方は完璧に抑えることは出来ないが速さ並みのもんじゃない」

「呪文は一回だったはずじゃ………………。まさか、合成しただと！」

「誰が一つの呪文で一つしか魔法を発動できないと決めた」

二つの呪文ことばを一つにすることはとても危険であり、身体への影響が大きい為、使用するのには千人に一人ぐらいと言われている。——

——天才エリートが使うのだ。

「そろそろ第二波だ」

「ッぐ！」

西武の男を第二波が襲う。今度は盛り上がるだけではなく、締め付ける。腰まで上がり西武の男を苦しめる。

苦しみに耐えきれず持っていた銃を投げてしまった。

「大地の奥深くの熔神ようしん、あなたの力を我が手に」

そう言いながら立ち、右腕を引く。

手に空気が集まる。手のひらを中心に吸い込むように。すると火の粉が散る。そして炎の塊が生まれる。これは先ほどの物とはケタが違う。密度といい、音といい、全くの別のもだ。

その塊が大きさを増す。

「この村の人の思い、貴様のあやまち、世界の天罰、神の、裁きを受けがよい！」

ボロキレの男は勢いよく炎の塊の投げつけた。ねらいは……………

……………、脚。

一瞬の出来事。この炎の塊は一瞬にして西武の男の足に当たった。

「ぐああああああああああああああああああああああああああああッ！」

この声は周りのギャラリーの村人にも聞こえた。だが、皆が目を伏せる。

西武の男は倒れた。それも股から。
そう、彼の股から下は溶け去った。

ボロキレの男が後ろを振り向き、歩み始める。その姿勢は、その姿になるのは当たり前のことだと悟るように。

足を無くした男は声をかける。

「おまえは、いったい……………」

「…、」

「おまえは、神、なのか……………」

ボロキレの男は立ち止まった。そして、

「あなたの想像する神が私なら、それでいいでしょう」

違った。声が違う。戦っているときはとても低い声であった。し

かし、今は優しく包み込むような声であった。

そしてまた歩み始めて、

「後始末はこの村の人にやってもらいます。誰もが償いを受ける権利はありますから」

そう言い彼は遠くへ、遠くへ行った。

それを見た村人足のない男に寄ってきた。拳銃がないことを確認し尋問を始める。しかし、その輪に入らない少女が居た。

少女はボロキレの男の後をつける。

v s. 気流使いエイル（前書き）

たいへん長らくお待たせしました。

自分、中学三年生でありまして受験シーズンです。さらに修学旅行などもありまして更新がとても遅れましたm（ー|ー）m

その為、誤字 脱字や内容がわかりにくいところがあります。そうしたところがありましたらコメントなどで報告お願いします。

なお、前話と同じ部分もあります。変わったところはないので『3』からお楽しみください。

時間が空いてしまったため最初から読んでいただくと分かります。います。

どうぞお楽しみください ^^

V S. 気流使いエイル

1

「報告です。銃使いのガンマン氏の生命反応が途絶えました。おそらく神使いによることでしょう」

「了解。今すぐ調査隊を送れ」

分かりましたと男は告げてモニターをいじくる。その後に無線のような物で連絡を取る。

「こちら本部、こちら本部。B班、B班に連絡。銃使いのガンマンの生命反応が途絶えた。至急調査隊を送ること。繰り返す。銃使いガンマン……………」

男が通信している時に、

「衛生SHALL-67suのハックはまだか」

すると一人の女が、

「ただいま第七階層まで突入しました。明日までにはハックは完了しそうです」

「使用までは」

「ハックした後の状況によりますが、だいたい四、五日です」

分かったといい後ろへさがる。そこに黒い椅子が現れ、座った。

ここはどこかの研究施設のように、空港の通信施設が暗くなったような場所だ。ただ、広い。壁ぎわには謎の生命が緑色の液体の入ったカプセルに入っていたり、体に付けるような吸盤付きのケープルや、それが繋いであるモニターなど、いろいろと怪しい。

（ついに銃使いまでやられたか。本当に神だな、あいつ）

すると後ろのドアから一人の女の人に来て、報告をしに来た。

「ストロング様、幻想使いのハルム氏が調整を終えました。そして、気流使いのエイル氏が戦闘から帰ってきました。そちらの方はミッシェン達成してます」

「ご苦労。ではエイルを神使いに送れ」

「しかしエイル氏は今、戻られたところですが」

「あいつの今回のミッシェンは簡単だ。たかが一つの国を滅ぼすごときだろ？ あいつにとっては物足りないはずだ」

女は了解しましたと言い、部屋を去った。

（神使^{あいつ}もこれで終わりだ）

2

「それであなたは誰？」

あの村から離れて二時間。この小さい少女はずっと尋ねている。

「だから誰？」

「君の思うものだって」

「だから誰？ 真実を教えて」

見た目は子供、と言うより子供だ。

「二時間前から言ってるとおりに、君の思うものでいいんだよ」

「だから誰？」

顔は隠れて見えないがため息をついた。

「本当に誰でもいいんだね？」

「ああ、いいよ」

「じゃあ————ジョン！ ジョーン、ジョーン」

やはり子供だと思う。はしゃぎ方と言い、子供になっている。

「じゃあ聞かせて、君の名前は？」

「……………」

「名前は？」

「ミル……………」

「そう、ミルちゃんか。よろしくね」

この時、ボロキレの男は理由を聞かなかった。こんなに言いたくなさそうに言ったことを。その代わりに手を出した。そう、握手を要求した。

ミルはそれに応じた。

「ジョンか……………、いい名前をありがとう」

ミルはその言葉を聞いてまた喜んだ。その笑顔は幼い子供だ。

「私ね、幻想使いなの」

「へー」

「私ね、本当は大人なの。あなたみたいなの」

この事を聞いたジョンは驚かずにいた。驚くどころか知っているかのような姿勢でいた。顔は見えないが、恐らく普通の顔をしているだろう。

「私ね、お友達と幻想使いになったの。そのお友達が格好良かったから」

ミルの顔が徐々に大人っぽくなっていく。

「私ね、その人が危険な幻術を使おうとしたから止めようと思ったの。だけど、止めに入っただけど、その人の顔を見たら手伝いたくなっただの。それで手を貸したんだ」

「そうしたら失敗してその体に」

「うん……………」

彼女は魔法の失敗によってこんな体になってしまったようだ。

「けどね、今これでいいの。神の決断に従わないといけないからね。神を裏切ることをしたから、こんな事になったと思うんだ。だからしょうがないの」

「ごめんな」

「あなたが謝る事じゃない」

重い空気になってしまったが、ミルが幼い顔に戻ったと思ったら、「けど、ジョンに会えたのは、このことがあったからで、あの時に

違うことをしてたらジョンには会えなかったかもしれないもん」

ミルの笑顔は幼いものだったが、それはそれで良かった。この笑顔を失いたくないと心に誓った。

「でね、でね。まだミルには幻術が使えるの。だからまだ幻想使いとして生きていけるの」

「そうか」

「だから本当の戦いになったら、幻想で元の姿に戻るの。そうしたら疲れるけど、その方が戦いやすいの」

ミルは自慢げに言ってるが、そう簡単なことではない。

幻術によって生み出される幻想は、中身がないため簡単に出来る。しかし、自分自身を幻想にしてしまうと通常の何十倍もの力を使う。更に、幻想は魔法と違い生まれつき持っている性質だ。その分自身への負担も人より多いのだ。そんなことを軽く言っているのだ。けど、この発言は一度やったことがあるような言い回しだ。よほどの自信があるのだろう。

「あなたって二十歳は超えてる？」

ミルが尋ねる。

「さあね。自分でもよく分からないが、ミルちゃんがそう見えるならそれでいいよ」

ミルは不安そうな顔で見つめる。

その後に言葉はなくなった。話すことがないのだ。数分歩いたところで、

「あなたにずっとついて行って良い？」

「今更なんだよ。あの村にはもう戻れないよ」

「私、あの村の人じゃないの。だからついて行って良い？」

「しょうがないな。途中でどっかに消えるなよ」

うんと大きな声で言い、大きく頷いた。

道は荒野を抜け、森に入っていく。

「きゃー。虫がいっぱい。こわいよー、ジョンー」

本当にこいつは大人かよと思うようになってきた。

この森はまだ一本道だ。多少、根っこが飛び出ていたり段差があるが、歩きやすい。坂が少しあるが急ではない。

「今日はこの辺で泊まるか」

ミルは赤い顔をして、

「ジョンのバカ！　こんな虫だらけのところに泊まりたくない！　やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだあああああああああああああああッ！」

冗談だよと言っても泣きやまないルミ。恐らくかなり困っている顔をしているだろう。

「ぶー」

「怒るなって、冗談だから」

「ジョンのバカ……」

ジョンの肩が落ちる。ため息をついているのだろう。

「んッ！」

「なに！」

やはり大人だ。ちょっとした殺気も感じ取れる。

「ジョン、誰かいるよね」

「ああ。さっきの奴とは違うね」

さっきのとは西武の男、銃使いのガンマンのことだ。

辺りを見渡す。木の陰に隠れているのか分かりにくい。

耳を澄ます。小動物の鳴き声ばかり。

どこにいろのか全く分からない。

「来る！」

ミルには感じられなかったようだ。ミルは、は？　とした顔をしている。

（ここにミルがいるのは危ない！）

そう判断したジョンはルミを草むらに飛ばした。

「キャッ！」

ミルは草むらの中へ飛ばされた。

そのタイミングに合わせたかのように突風が来る。

「んッ！」

ジョンは耐えた。

その風を払い、見た先にいたのは……………。

3

「きゃーッハッハッハー。お前が神使いか。なんだー、思っていたより素朴だなあー、おい」

現れたのは目だけが隠れる変なマスクを付けている。そしてピエロの様な服装。

「貴様には言われたくはない」

低い声で言う。

マスクの男は一步前に出て、

「はいはいそうですか。——あ、申し遅れた。私は気流使いのエイルだ。短い時間だが、よろしく頼む」

やけに礼儀正しいやつだ。敵によろしくなど言うなんて気持ちが悪い。だが、こういうやつがいてもいいと思う。

ジョンは額に手を当てる。当てると言ってもボロキレの上からだ。

「そうか。貴様は詐欺しか。騙しとった金額は軽く一三兆か…」

その後には小さく悪人めと呟いた。

「スキャンか…どんな能力なんだ——。『神使い』と聞いたが、まあ良いか。相手が誰であろうと使命を果たす、それが私『詐欺師』だ」

「貴様の行った事は神の裁きを受けなければいけない。ここで散るが良い」

「それは無理な事だ。私はおまえをここで始末するから。——とか言っというてここではない」

ジョンはややこしい奴だと言い手を広げ、

「貴様は悪人と言うことは変わらない、変えることのできない運命だ。ここで散る通い」

そして告げる、「神は悪を裁くのみ」と。

「やれるもんなら………やってみろおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

エイルの叫びは魔法陣の組み立てと重なる。

「風と刃の合成式、我を守りし式！ 与えるのは死！ 我の力は無敵！」

「ッ！」

ジョンは気付いた。魔法陣を立てた後に呪文を唱えていた。だが、予想外の行動が起きた。

エイルは組み立てた魔法陣を殴りつける。

「発動！ 大地死の風！」

ジョンは理解した。恐らく魔法の力を感知したら発動するようになってる式も展開しているのだろうと思った。

パリンッ！ とガラスが割れるような音がした。それは魔法陣が壊される音。そして割れる破片から漆黒の光が散る。

「暗黒の光にさらわれろ！ この下級品めが！」

「いくつ魔法陣を構築し呪文を唱えれば済むのだ！ そんなもんで私を倒せるとでも！」

やはり告げる。『神は悪を裁くのみ』と。

そう告げている頃には破壊された漆黒の光が突風に乗せられて飛ぶ。目標は神使い、ジョン。

「その光に触れれば何もかもッ！」

「粉碎はさせぬ！」

ジョンの言葉が間に入る。漆黒の光は勢いを増してジョンを襲う。

「我を守る光の壁！ 立ちはだかれ！ 光鉄壁！」

言葉の通り、光の鉄壁。その壁はジョンの前に広がる。色は透明気味だが光り輝いている。

だが、漆黒の光はその壁を避ける。

「さて問題。私は何個の魔法を仕掛けたでしょう？ 正解者には、地獄を！」

避けた光は後ろからジョンを狙う。

「答えはな……………、四つ！」

後ろへ手をかざした。それを握りつぶそうとする。そして、

「散るよい、神は悪を裁くのみ！」

そう言い手を握り、勢いよく手を開く。ジョンが言った通りにちり去った。だが、エイルは笑っている。それがどうしたと顔が伝える。

「大地死^{だいちし}の風はこんなもんで終わらない！ これは始まりにすぎない」

不気味な笑みを浮かべるエイル。その笑みが合図となり、散ったはずの漆黒の光がよみがえる。それはジョンを取り囲む。だが冷静にしているジョン。何かの動きを待っているようだ。

（こんな小細工。俺には効かない言うのに……………。使うか。いや、もったいない）

ジョンは何かを考えているようだ。

「何、深刻そうな態度をとる。顔が見えたら楽しいのに」

「おまえに少しだけ見せようか、我の真の力を」

ジョンは両手を軽く広げた。深呼吸をするみたいだが息を吸ってばかりのようにも見える。すると、漆黒の光が消える。これにはエイルも驚きが隠せない。

そして、自分でさえ聞こえないぐらいの声で呟く。

「——領域、我的手、人を超える。——分離」

その小さな小さなつぶやきは、エイルにも届かない。

「お、おい、なーに息吸って力を溜めてんだ？ しょうがないから待ってやる。早くしてくれよな」

ジョンは答えず、右手を前に突き出す。何かを溜めているかのような姿勢は取らないが、気流使いには分かる。少し、空気の流れが

変わっている事が。そして、嫌な殺気を覚えた。

「ッ！」

ようやく気がついた。ジョンの手には光が集まっている。それは見たことのない光。美しく輝いているが輝かしいだけではなく迫力も感じ、戦場で生き延びてきた殺気を感じ取れる。

これは危険だ。そう感知したエイルは急いで魔法陣を立てる。もちろん防御式。

(風鉄壁と地水壁を立てよう。それも複数立てないとな)

その防御式は同じように少しずつ違っている。それも何かを考えながら立てていく。焦りではなく、計算。

「来るが良い！ こちらも準備は出来た！ さあ、かかってこい！」
だが、その言葉はジョンには届かない。届いているかもしれないが答えない。

ようやくジョンの口が開いた。その言葉は、

「――散れ」

その二文字。すると、ジョンの手から凄まじい勢いで光線が放たれる。スケールも迫力も力も、何もかもが人間が作り出せる魔法の限界を超えている。

(これが、神使い……、)

神のような力、言われていたのは多種多様の魔法を使い神のようだから『神使い』と聞かされたが、これぞ神の力。神技。それ以外に表現できない。

その光線は大きく、余裕で一人なんか飲み込める大きさだ。さらに、輝き方、音、速度、何から何まで桁外れ。

エイルにとってそれが楽しみ。

「これがおまえの力か！ 楽しませてくれんなー！ ―――この式は防御式。風鉄壁、地水壁、魔壁、緑芯壁、背水壁の魔法陣だ。そして、それらの魔法陣の中心を結び大地死の壁を発動！ この壁を崩せるもんなら崩してみろ！ ハッハッハ！」

エイルは大声で笑う。そして大地死の壁の魔法陣が組まれて、発

動。その他の魔法も発動される。

そして、衝突する。光線と壁がぶつかり合う。力は互角。押されることも引かれることもない。ただぶつかり合っている。

（さすが神の力、互角に戦うとは。だが、私には勝てぬ。——ッ！）

エイルの防御にはムラがあるが、ジョンの攻撃にはムラがない。一定である。その為、自分のムラにつけ込んでくる。じわじわと壊れていく魔法陣。

すると後ろから、

「君の眼には何が見える」

ジョンの声。低く響く声が聞こえる。

そして疑問。

今、自分の前で戦ってるのは誰だ。

焦り、迷い、そして自分で心理戦に負ける。

おそろおそろ振り返る。そこには神使いジョンがいる。自分はおびえている。今ここで起きている現象が自分でも理解できない。

と言うより何が起きているのか分からない。なぜなら今もまだ攻撃を受けている。

「遠隔操作、とでも言っておくか。ここで浄化してやる。——神は悪を裁くのみだ！」

その後の風景は白。ただまぶしい光に包まれた。

4

その場にはさっきまで戦ってたピエロ姿の気流使いエイルはいない。神使いと呼ばれる男、ジョン（仮）しかない。はずだった。

「逃げられたか」

ジョンの低い声。すると奥くから、

「そのようだね。けど、本物は近くにいますはずだよ」

ジョンの高い声が聞こえる。そこにはボロキレの男。そう、ここにボロキレの男ジョンが二人いるのだ。

「ああ。それより元に戻ろうか」

そう言って声の低いジョンが声の高いジョンに近づく。すると二人が光に包まれて合わさった。

「さて、ミルでも探すか」

高い声にジョンはそう言って草むらの中に入った。

「くそ、どこで寝てるんだ？ えーとえーと……」

探していると寝ているミル。それは優しく、おとなしく、かわいらしい寝顔。飛ばしたまま倒れ込んで寝てしまったようだ。

小さく、スーハースーハーと口から息をしている。

起こすかそのままにして抱き上げるか迷った。しかし、時間があるから少し見ることにした。

少し経ってから少女ミルに動きが見られた。

「——ハ、ハル……ム……」。——ダメ！ そこへ行った
ら！ ——ッ！」

ミルがうなつてすぐに目が覚めた。

「あ、あ……、ごめんなさい！」

顔をすごく赤くして起きあがった。変な汗をかいて尋ねてきた。

「ど、どどどどの辺から、み、みみみみ見えました!？」

「今見たところだよ」

「嘘だ！ 顔に書いてるもん！」

ものすごく恥ずかしそうだ。頭に卵を置けば三秒も経たないうちに目玉焼きが出来るだろうと言うほどに湯気が出ている。

「そんなことより、この辺は危険だ。速く移動しよう」

だが、ミルは何も理解していないようだ。はてなと首をかしげている。まあしょうがないだろう、ついさっきまで寝ていたのだから。「どうして？」

やはり聞いてきた。

「傭兵。気流使いのエイルがここにいる。世界でもエリート中のエリートだ。傭兵達の中では知らない人はいないほどのやつがこの周辺にいる」

「なんで？」

「理由は聞かれても分からない。恐らく、僕のことだろう。まあこんな所で語ってる時間はないから行こうか」

ジョンはそう言って歩み始めた。ミルもそれに追いつこうと急いで追いつく。

5

「気流使いエイル氏から通信です」

「通せ」

座っているストロングという人。恐らくこの組織のトップである。その前にモニターを待ってきた。そのモニターは何もない虚空の所にあるものの一つ。

『よ、隊長。ハルムをよこして』

「なぜだ」

『神使いについてだ。あいつを騙すには少しだけ力を借りたい』

「戦ったのか？」

『自分は戦ってないが、』

「が？と言うことは」

『身代わりを戦わせてデータ回収を。知りたいッすか？』

「速く言え」

ストロングは新たに二つのモニターを自分の所に持ってきた。

『神使い、あいつは主にガード主義。あいつが息を大きく吸った時にこの世の物じゃない力を出してたぜ。あと二重人格的なもんもある。一つは天使と例えるならもう一つは悪魔だ』

「どういう事だ」

『んー、何だろ。んまあ、あんたと同じ匂いがするんだ』
「なんだと」

『んなカリカリすんなって。けど似ているあんたと』

「おれとか」

『ああ。まあとにかくハルムが必要だ。猫騙し程度だが力を借りた
い』

「了解。今から十分で送る」

『了解しあしたー。んじゃよろしくな』
『そう言っエイルて向こうから通信を切った。

（やはりあいつが、）

すると後ろから、

「行けば良いんですね」

「話は聞いていたなハルム」

「分かりました」

「おまえの使命は分かってるよな」

「ッ……」

「ミルというガキを連れて来たらおまえもあいつも元の体に」

「分かってます。それでは行ってきます」

「フンッ」

幻想使いのハルムはその場からすぐに消えた。

（やはりそうか、あいつは）

「あの、」

声は通信係の女。

「なんだ」

「あの、本部政府基地の移動の件は」

「まだだ、神使いを殲滅してからに変更する」

「分かりました」

女はすぐにモニターに顔を戻した。

（神使い………）

三十分が経過した。未だに森の中にいる。

「ねーねー、まだかなー。後何分？」

「これで十九回目。もうすぐだって」

「ねーねー、まだまだ？　もう歩くの疲れた」

「どっこしてほしいの？」

すると慌てて、

「そそそ、そんなことないです。はい、平気です」

とてもと言うまでではないが照れている。正直言っこちらまきまづくなる。

「それで……………、後何分？」

ついに二十回目来たー！！　と言う感情は抑えて話題を変える。

「ミル、服変えないか？　その服じゃ僕と一緒にいると目立つから」

ミルは少し黙り込んで、

「分かった……。けど、行動時だけね。戦闘になると幻術で姿、変えるから」

「ああ、いいよ」

「それでー、どんな服が良いのかな？　ヒラヒラのが良いな」

「ちよっと目を閉じて。望みのもんじゃないけど」

ミルはやや戸惑って、うんと頷き目を瞑った。

そのミルの頭の上に手をかざし光がまとう。そして神使いと言われているジョンは呟く。小さく淑やかに、自分の声さえ聞こえないぐらい静かな声で、

「——通信。天域の物へ告ぐ。我は太陽神ソウル。この少女に我と同じ神装を」

ミルには聞こえていないようで目を瞑っている。

するとジョンの手から光の粒が現れる。その光の粒はミルを包み込む。するとその光は服となる。その服装は、

「僕とお揃いの服」

そう、光のベールから現れたのは茶色のボロキレ。ジョンと違うのは顔が見えると言うところ。ジョンは全身（しいて言うなら足以外）が隠れているがミルのはフードのようになっていて前が見える。「もう目を開けて平気だよ、ミル」

ミルはおそろのおそろ目を開けた。ミルの見る世界は変わらず、着心地も変わってないため実感はないようで辺りを見渡す。そして自分の服を見た。

「うわああああああおおおおおおお！ ジョンと一緒にだ。ヤッター！！」

ミルは飛ぶように喜んでくれたため自分も喜んでる。小さな物語が終わり、新たなのも語りが始まる。

「着いた………が、ここが町か。町と言うよりムラだな」

着いたのは小さな小さなムラ。森を抜けて出てみれば砂漠。その上に砂の塊、おそらく建物だ。人気は少ないが、わずかに声が聞こえる。

「やったー、つーいたつーいた♪」

ミルは走って町に入っていく。ジョンはその後を追う。

「思っていたよりちゃんとした町だな」

入ってみると想像を覆す風景。^{くっがえ}人が多くいるのだ。さっきまでは奥が見えていた錯覚をしていたように多くの人がいる。

「安いよ安いよー、今だけ安いよー」「へい、いらっしやい」「このピーマンくれますか？」「あら奥さん、昨日のやつ聞いたー？」

と、ごく一般的なムラ、いや町に見える。服装も変わったところはなく、自分たちが目立つ気がする。だが、周りも似たような服装をしているからとけ込んでいる感じた。

しかし、ミルは足を止め、

「怖い、この町の人。何か怖い、よ、ジョン……………」

「そうだな。平気だよ、僕がいるから」

うんとルミは頷いたが、やはり不安そうだ。だが、ミルが恐れていることはジョンも同じだ。

歩いていると右にいる人、左にいる人、さっきいた人、今初めてあった人、全て同じように見える。それに声。体型に合わないすぎる声。いや、体型どころか性別に合わない声。さらに、年齢的な声。がたいがいの子どものような声。更に口と声が合わないで会話が進む。そして、

（会話が成り立たない……）

そう、会話が成り立たない。

するとミルの口が動いた。

「……………分かつ……………た、かも。……………幻覚、幻聴……………しっか
りとした具現化だけではない。おそらく、惑わす程度の物……………で
は」

「……流石^{さすが}だな。幻術の一種だなこれは。けど複合が多いな。けど、
最低限の事しか使っていない」

「何でそこまで、」

「だって、口と声がそろってないし、会話が成り立たない」

そうジョンが言い立ち止まった。そして近くにいた少年の方を指
さした。そのこの会話が聞こえてくる。

「昨日のアレ見たー?」 「ああ、あそこのチャーハン美味^{うまい}いよなー」

「また遊びたいなー」 「勉強なんてしてらんねー」

聞いている通り会話が成り立っていない。それに、声も違う。同じ
少年が言っている、年寄りの声だったり成人の声に聞こえたりと。

「じゃあ……………」

「行くぞッ!」

ミルは、え!? と言う抜けた声を上げた。ジョンはミルの手を
つかみ空へ飛ぶ。

「うわわわわあ!」

「ミル、安心しろ。僕がいる、守ってあげるから」

ミルはおそろおそろ頷いた。しかし、その表情は迷いが読みとれる。どういう迷いかまでは読みとらないでおいた。

「くるッ！」

ジョンが叫ぶと町が爆発した。

「ついに始まったか………。気を付けろミル、気流使いの」

「エイル様だ！ 覚えてくれてありがたいよ。ハハハッ！」

言葉は遮られた。声の元は爆風の中。爆風の中から人影が現れる。それは気流使いエイル。服装はピエロ、更に顔にはマスク。あの時、倒したはずのダミーと同じ格好。

「今度は本当の、気流使いのエイルか」

声（人格というのだろうか）が変わってく。天使のから悪魔に変わるように高い声が段々と低くなっていく。

「ほほう、人格が変わったか」

「貴様は傭兵、よって悪人と見なす」

「神は悪を裁くツてか」

「神は、悪を裁くのみ！！」

—— 決戦の幕開けだ。だが、ここで少女ミルの口が動いた。

「ジョン、待って。ここは私がやる。あなただけに任せたくない。戦わせて」

少女の目は燃えていた。こいつは私は倒すと訴えるように。手にぶら下がっていたミルはポケットから漆黒の石を取り出した。

（げんせき 幻石か、これは）

「これはね幻石って言って、幻想が使えない人が使う石。本当は幻想術を強化するもんなんだけど、特別に改良してあって私でも幻想が作り出せるようになるの」

ジョンは幻石については知っていた。しかし、それを軸にして幻想術を発動することが出来るなど聞いたことがない。

「行くね」

ミルは手を放してと言わないが感じ取れたため恐る恐る手を放した。少女は何もない空に立っているのだ。

幻石をネックレス状の鎖にはめ込み首に付けた。少女は目を閉じ両手を前に出した。

足下に魔法陣。魔法発動と違う式ということはジョンには分かる。虚空から何かを掴むように握る。いや、何か掴んでいる。

ミルは勢いよく右後ろに手を引いた。首の幻石が黒に光り、そこから黒い煙のような霧が現れた。その霧から現れたものは、

「おやおや？ 神使いさんよー。もしかして小さな子に鎌^{かま}なんか持たせて俺様と戦わせる気か？ あん？」

「自分の意志で戦おうとしている。こいつにも裁く権限はある」

「はー、あんたもヒーロー気取っちゃって」

「あなたにはこれ以上好きかってさせない」

割り込んできたのはミル。持っている鎌を気流使いのエイルに向けて発した。

「なーなー。俺がいつ何をしたって言うんだー？ 嬢ちゃん」

「私の、私の村を滅ぼした！！」

ミルは涙目で叫んだ。

「ほーほー。つー事はおまえが噂の奴か」

（ハルクを呼んどいて正解だったな）

「何よ。私は、私はあなたを絶対倒す！！」

ミルは鎌を引いた。そして魔法陣が現れる。これも魔法発動の式とは全く違う。ミルは現れた魔法陣を鎌^{かま}で切る。

すると、魔法陣が引き裂かれ闇があらわとなる。

（これは、暗黒の門）

暗黒の門とは術者が通る道の途中にある門のこと。ここを通れる者のみが幻想術者になれるという言い伝えがあった。しかし、それがあるとは信じてなかった。

ミルはその暗黒の門をくぐった。

するとそこには小さなミルはいない。出てきたのは別人。服装は死神^{しにがみ}のような黒く中が赤いマント。手にはさっきと変わらぬ鎌^{かま}。だが幼いはずのミルではなく、十代後半の女が出てきた。

「ジョン、これが私の本当の姿」

だが、声を聞くと分かる。この人はミルだ。

「ジョン、止めないで。この人は私に関係がある」

「分かってる。ミル、おまえが裁け」

ミルは頷き前へ飛ぶ。

気流使いエイルは構える。そして言葉を放つ。

「すでに起動しているんだ！！ 大地死の風を！！」^{だいちし}

ミルが突撃した。気流使いは動かない。いや、ただ動こうとしないのではなく余裕を見せているように受け取れる。

ミルはエイルにぶつかった。ハズであった。

「幻術……。——ハル……ム？」

「ほほー。やはり知っていますか」

声の元は上。自分より遥か上だ。さっきいた場所には霧。霧は消える。そこには何もない。

「ねえ。ハルムはどこ」

エイルに向かって放った言葉。

「さあどこかな。けど、今の敵は僕だよ」

「黙れ！！ 今どこかって聞いてんだよ！！」

ミルは怒りを抑えきれずに力を無駄に使う。ミルの幻石が揺れる、いや震えていると言った方が正しい。生き物のように細かく震える。

「あんたを墮^おとす！」

持っている鎌を上に向かって振りかざす。その軌道からは闇。次元を引き裂くように現れた闇からいくつかの球体が現れる。

その内の一つを鎌で切る。切れた球体のはじける。背景ががらりと変わる。どこかの森となった。

「ちッ！ 幻想崩しとでも言うのか？」

「そう。あなたの罪を味わうと良い」

更にもう一つの球体を切る。球体のはじけまた背景が変わる。

その背景は焼けている。村の形がうっすらと見えるが焼け地獄となっている。

「ミル、ここは……おまえの村か」

「そうよジョン。この村がこんな風になったのはこいつのせいなの」
ミルは一步足を引いて、

「だから、ここで墮^おとす！」

虚空の空を蹴って遥か上のエイルの方へ飛ぶ。鎌を構える体制は出来ている。もちろんのように闇から出てきた球体はミルについてくる。

「残り球体が五コ。と言うことは幻術は五コか」

「それはどうかな」

エイルとの距離が縮まり、鎌を振りかぶれば当たる。そのまま鎌を振り切ろうとした。

しかし、エイルは小型のナイフを手に持っていた。そのナイフで鎌の動きを止める。

「う……ッ！」

ミルはすぐさまさがり突撃する。だがまたも止められる。止められてはさがりまた突撃。何度も何度も繰り返す。

「あなたのやったことは許せないこと！」

「はッ！　だが過去は関係ない。今が大切なんだ！　過去はどうだって、良いんだあああああ！！」

「そんなことはない。過去だって大切。それを大事にしてこそ強くなる！」

ミルは叫び、後ろにさがったまま力を溜める。

「じゃあ、おまえがしている幻石はなんだ」

ピタッ！　とミルの動きが止まる。まるでコンセントが抜けたように。

（やはりな）

ジョンは思う。

（ミルの幻石の使い方が普通ではないな）

「おまえの幻想術、習得法。生まれつきの幻術ではない」

ミルの表情から、何で知っているのよと言ってるかの顔つき、汗。

「知っているぞ。その幻想術の手に入れ方。人体実験の研究所に入り込んで」

「ちがう！！
ちがくはないけど、
違う！！」

「じゃあなんだい？」

ミルは動かなくなる。エイルは笑って話を進める。

「知転実験。ちてんじつけん 幻石を使って幻想術を独自に作ろうとした学者。研究成果の発表後、人体への影響、負担が大きくなると言われ失踪。行方不明となったその学者は発見されたが変わり果てた姿となっていた」

一呼吸置いて、

「知転実験が原因だった。その知識の移り主がおまえだ」

ミルは震えだした。違う、違うと呟いている。そして体が元に戻っていく。球体が消え、鎌も消え、本当の姿も霧となつて消えた。そして、さっきまでの小さな小さな姿になった。

「その知転実験でその学者は死んだ。ということは、おまえも神の裁きを受けるべきではないのか？」

.....

何かを言いたそうに唇が動くが、震えていて声が出せない。

「じゃあ俺が神使いさんの代わりに裁いてやるよ！」

一気にミルとエイルの距離が縮まり、手をかざした。

「発動！ 大地死の風！！」

その言葉と連動して手の前に魔法陣が現れる。

「大地よ唸れ！
その風で！！」

魔法陣が黒く光る。起動。魔法が魔法陣によって起動した。

[illegible]

「死ぬのはおまえだ、学者の命を奪った男。自分の罪を人に向けるな」

大地死の風の魔法陣^{しき}が崩れる。

「な、なぜ……………」

立場逆転。気流使いエイルの顔が引きつる。声は後ろ。見る余裕はなさそうだ。

「神は全てを知っている。おまえが学者を殺した」

「……………」

「失踪後、おまえに会って身を隠してもらった。そこでその学者はこの少女に自分の知識を与えた。それを見たおまえは学者を殺した。だがミルは知識を渡して死んだと思いこんだんだ」

「なぜだ！」

エイルは後ろを向いた。そして小さなナイフをポケットから取り出して声の方へ投げたがいない。

「自分で殺しといて人になすりつけるとは。ここで死ぬがよい！」
急いで周りを見渡した。ただでさえ誰も知らない真実を知っているものだから焦り、もう一つの真実を知って焦る。おびえる。恐怖を覚える。

「……………ここは……………、まさ……………か……………」

辺りは白。確かここはダミーが殺された、

「天域。我、太陽神^{たいようしん}ソウルが呼んだ」

「おまえは……………、一体なんだ……………」

「太陽神だ」

「……………かみ、だと……………」

「天域の守り神ガーディアン。こいつを裁くがよい」

エイルの最後の言葉、——神なんかに、負けるなんて——

場所は森の中。天域に行った神使い、いや太陽神ソウルは元の世界に戻っていた。森の中だが、草むらが広がっていて木が少ないところに居た。いつも通り、小さなミルとボロキレの男。

「幻想使いのハルクはもう居ないか」

一人で呟く。ミルは太陽神が消えてから気を失っていた。幻術が開放されて力を失いそのまま落ちたのだ。

「——ん……………ん」

ミルは目を覚まし、その場に起きようとした。

「ジョン、あなたは神様なの？」

「…、」

「全部聞こえてた、夢かもしれないけど聞こえてた。自分があの人を殺して無いのは分かって良かったけど、ジョンは神様なの？」

「ミルがそう思うならそれで良い」

「分かったよ、ジョン」

話はこれで終わった。

「ストロング様」

「分かってる」

どこかの暗い研究施設の中。音はキーボードをたたく音、マウスのクリック、吐息。そして機械の音。

「あいつまで消えたか。捜査隊を送れ。同時にハルムを連れてこい」
「分かりました。すぐに手配します」

（神使いっというのは、あいつだったりするのか。しかしあいつは……………）

ストロングという大將は考えていた。

「おい、次は魚使いウォールだ」

「了解しました。——ウォール氏、聞こえますか……………」

（ウォールでダメなら、俺だな）

ストロングは自分の前のモニターを横へ払い、席を立つ。

「ストロング様、どこへ行くのですか」

「調整、だ」

椅子が消えドアの方へ歩いて行った。

（ウォールもどうせ死ぬ。なら俺の神の力で粉碎するのみ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0355x/>

二神 ～神は悪を裁くのみ～

2011年11月23日14時47分発行